

空母”遼寧”が遠海訓練に赴く

専門家：大編隊訓練は聯合作戦能力を具体化する

ソース：人民網-軍事チャンネル 20161226 10:17

阿部信行

(訳者コメント)

最近、中国空母遼寧は僚艦を従えて第一列島線を越え、西太平洋に進出しましたが、中国人民網に関連記事がありましたので紹介します。
中国の宣伝記事ですが航海の目的と現状を記述しており、今回の航海は課題の把握が主目的であったことが分かります。
遼寧艦での戦闘機の発着訓練は従来陸地から近い海域で行われ、パイロットは、離艦後、トラブルがあれば陸上基地に着陸することができたはずで、心理的に安心感があったと思われます。しかし今回の航海はトラブルがあっても陸上基地への着陸が全く期待できない遠海でありそれが艦載機パイロットへの重圧になったと思われます。
記事ではパイロットへの試練であると述べています。



東海某海空域に到着した遼寧艦艦載戦闘機の訓練

人民網北京 12 月 26 日電（記者 黃子娟）

12 月 24 日、海軍遼寧艦編隊は、遠海訓練のため西太平洋海域に赴いた。今回の訓練は年度訓練計画に従って行われた。軍事専門家は、中央テレビの取材を受けた際に、この種の全要素及び全過程を含む訓練は、艦載機パイロットにとっては大きな試練となる。今回の海域を跨ぐ訓練は、遼寧艦にとって小編隊から大編隊への転換であり、主として協同と聯合作戦能力の向上を目的とする、と述べた。

訓練環境を実戦に近づける

メディアの報道によると、空母編隊は、24 日午前東海海空域で全要素訓練と試験任務を行った。このあと、様々な色彩のジャケットを着た甲板員の指示のもと数機の艦載戦闘機と各種タイプの艦載ヘリが離陸し、着陸した。訓練計画によると、艦載機パイロットは空中戦術対抗及び空中給油等、多くの訓練課目を行った。離陸した各種艦載ヘリは、それぞれの課目の訓練を行った。

尹卓（海軍少将）は、「遼寧艦編隊が西太平洋海域で遠海訓練を行うことは、極めて重要な意味がある。第一、艦載機部隊の規模は 1 個連隊規模に近づいている。警戒ヘリ、救難ヘリ、及び対潜ヘリが訓練に参加し、艦載機部隊の総合作戦能力を高めた。第二、訓練中、赤青部隊に分かれて対抗戦を行ったことは、艦載機部隊がすでに技術訓練の段階から戦術訓練の段階に入ったことを示している。このほか今回の訓練は、空中給油等の高難度の訓練も行った」と述べた。

また尹卓は、「今回、海軍が列島線から出て訓練を行ったことは、レベルを確実に高めた」と述べた。列島線内に比べ、列島線を出たあとは、海況が悪化した。艦載機の着艦の難度は増大した。このほか日、米航空機等の追跡、監視を受け、電磁環境も複雑になる可能性があった。したがって訓練環境は実戦に近かった。

飛行から戦闘への転換

遼寧艦が西太平洋での遠海訓練に向かう前夜、中国海軍は、空母編隊に実際に武器を使用する訓練を実施させた。訓練は渤海の某海域で行った。出動した艦艇は遼寧艦を含め各種艦艇が数十艘、航空機が数十機、さらに空対空、空対艦、艦対空等、各種ミサイルを十数発発射した。訓練間、遼寧艦と数艘の駆逐艦は編隊を組み、偵察早期警戒体系、空中迎撃、対海突撃、対ミサイル防空等の課目を演練した。J-15 艦載戦闘機は、実弾を搭載、何度も演習海空域に進出し攻撃行動を実施した。

空母編隊として、この種の高強度の訓練を課すことは艦載機パイロットにとって大きな試練ではないだろうか？杜文龍（中国の軍事専門家）は、「専門用語上から、全要素、全過程訓練とは死角のない訓練を意味する。装備、人員、持

場（セクション）を含めた全ての要素が、実戦的訓練を必要としている。これが艦載機パイロットにとっては重大な試練である」と述べた。

杜文龍は「跨海区訓練においては、それぞれの海区の気象条件が同一ではなく、海軍艦載機パイロットは天候に特に敏感になる。パイロットは、実戦能力を高めようとするならば、少なくとも二つの関門を通過しなければならない。第一、以前の訓練の重点は、遼寧艦上で如何に航空機を操作し（安全に）離着陸させるか、及び巡航間には如何に正確に飛ぶか、にあった。現在は訓練が実戦化に向かっており、実際に武器を使用し、空対空能力、空対艦能力等を高め、成果の極致を発揮しなければならない。そうやって初めて飛行が戦闘に転換するのである。第二、” 刃先の上のダンス” を” 波の上のダンス” に変えねばならない。艦載機の空母への離着艦は、” 刃先の上のダンス” と称され、難度が極めて高い。この種の技能を掌握するためには長期の訓練が必要である。現在、” 波の上のダンス” レベルに到達したことは、我が艦載機が敵のレーダーの探知範囲を避けて超低空飛行で攻撃可能になったことを指す。こうすれば敵を有効に攻撃することができる。この角度から分析すると、我が艦載機の飛行能力、戦闘能力は、すでに高い水準に達している。現在、この種の訓練形態を継続し、厳しい海況下での各種高難度訓練を実施してゆけば、実際の作戦能力は標準レベルに近付くことになる」と述べた。

協同及び聯合作戦能力を具備する

今回の訓練では出航以後、渤海、黄海から東海（東支那海）に至る間、空母編隊は航行しながら訓練し、合成化、体系化、実戦化の訓練方法を研究し、全要素の艦・機融合と空母編隊協同指揮訓練を行った。航行途中、空母編隊はまた海上補給訓練を行った。

この種の跨海域訓練において空母編隊の主要な課題は何か？

杜文龍は「以前の遼寧艦の訓練は、単艦訓練或いは小編隊訓練であった。今回は的小编隊訓練から大編隊訓練に転換し、主として協同及び聯合作戦能力を具備した。今回の訓練は、水上、空中の様々な作戦兵力とコンピュータシステムが参加したため、指揮統制が特に重要であった。例えば、1 発のミサイルが発射された場合でも、細部に影響を及ぼした。早期警戒機或いはレーダーが目標を発見し、脅威の大小を判断し、その方向の駆逐艦、護衛艦、艦載機等が具備する迎撃能力等について一連の計算を行った。一体化した指揮系統及び精密な計算によって、空母編隊は総合戦力を発揮することができる」と述べた。

また彼は「作戦行動には、戦闘中の艦載機及び空母だけが参加するのではなく、多種類の作戦艦艇、多種類の艦載機、多種類の武器装備も参加する。これほど多くのコンピュータシステムと武器を一体として接続させるには、背後の指揮情報化手段が極めて重要である。現在、我々が直面している課題は、作戦時、空母編隊を如何に協調させるか、にある。そうすることによって初めて遠海地区において編隊の総合戦力を強化することができる」と述べた。

編集責任者：黄子娟、閻嘉 QI(王偏に其)

以上